

釈論大江千里集（七）

小	半
池	沢
博	幹
明	一

〔前説〕

本稿は、「釈論大江千里集（一）（二）（四）（六）」（『長野工業高等専門学校紀要』五一号、二〇一七年六月、同五二号、二〇一八年六月、同五三号、二〇一九年六月、同五四号、二〇二〇年六月。いずれも電子版のみ）および「同（三）（五）」（『共立女子大学文芸学部紀要』第六五集、二〇一九年三月、同第六六集、二〇二〇年三月）の続稿であり、今回は二四番歌から二八番歌の五首を取り上げる。本釈論全体の目的と意義の詳細、凡例や参考文献などについては、「釈論大江千里集（一）」を参照されたい。

蟬不待秋鳴（蟬は秋を待たずして鳴く）

二四 うつせみの身としなりぬる物ならばあきをまたでぞなきぬべらなる

【通釈】

釈論大江千里集（七）

蟬のような（はかない）身となってしまうものなら、秋を待つこともなく泣いてしまいたいものであるよ。

【語釈】

うつせみの「うつせみ」は、万葉集で、「うつせみ（空蟬）し 神に堪へねば 離れ居て……」（万葉集・二・一五〇）、「燈火のかけ
 にかがよふうつせみ（虚蟬）の妹が笑まひし面影に見ゆ」（万葉集・十一・二六四二）と詠まれるように、「うつ（現）しみ（身）」つ
 まりこの世の人、この世が原義。ただし、枕詞を含めた全四〇例中一七例が、「空蟬」「虚蟬」の字を当てており、蟬の抜け殻の映像を
 重ね合わせていたらしい。平安時代以降は、「空蟬」のからは木ごとにとどむれどたまのゆくへを見ぬぞかなしき」（古今集・十・物名・
 四四八）、「うちはへてねをなきくらす空蟬のむなしきこひも我はするかな」（後撰集・四・夏・一九二）のように、蟬そのものを表す
 ことが多い（『対釈新撰万葉集』三四番歌の【語釈】該項を参照）。また、「空」「虚」の字義から仏教的無常観に結び付けられ、挙例の
 後撰集歌の他にも、「空蟬の世にもにたるか花ざくらさくと見しまにかつちりにけり」（古今集・二・春下・七三）、「うつせみのこゑき
 くからに物ぞ思ふ我も空しき世にしすまへば」（後撰集・四・夏・一九五）のように、はかなさ、むなしさを喚起する用例が多い。当
 歌も同様であるが、「うつせみの」は「身」にかかることから、「……うつせみの（打蟬乃） 借れる身なれば 露霜の 消ぬるがごと
 く……」（万葉集・三・四六六・大伴家持）のように、比喩的な枕詞として使用されている。ただし、枕詞としての「うつせみの」は、
 平安時代以降、挙例の古今集七三番歌のように、「世」にかかることが圧倒的に多く、当歌のように「身」にかかる用例は稀で、「ひく
 人もむなしくならば琴のねもうつせみのみやいまはしらべん」（宇津保物語・忠こそ・忠こそ・一〇六）があるも、この「うつせみ」
 は現し身の意。

身としなりぬる「み（身）」は肉体の意から自らの肉体、さらには自分自身の意も表す。当歌では、「身」を修飾する「うつせみの」
 に蟬という意味の実質性の関与を認めるならば、自らの肉体の意がふさわしい。蟬の意の「うつせみ」で「身」にかかる用例としては、
 「ねにたかくなきそしぬべきうつせみのわが身からなるうきよと思へば」（元良集・六三）、「むなしくてやみぬべきかなうつせみのこの
 身からにて思ふ歎は」（山家集・一三三七）など、「わが」や「この」を伴う歌がある。いずれも恋の嘆きの原因が「わが身」「この身」
 にあることを詠む。本集に「身」を含む歌は一五首（二二・〇％）もあり、古今集の八四例（七・六％）より割合が多く、注目される
 （二九番歌【語釈】該項参照）。「し」は強意の副助詞。

物ならば「物」は、初・二句を受けて、蟬のような（はかない）身となってしまう事態を表す。本集に「もの」は八例あるが、当歌も入れて四例が、連体修飾句を受けて、その内容を概念化する形式名詞（二四・三六・六二・一〇四）、三例が「ものを（ぞ）おもふ」（三九・六〇・一〇三）、一例が「ものおもふ」（四二）である。ただし、「もの」の基本的意味を、「変えることができない、不可変のこと」（大野晋『古典基礎語辞典』角川学芸出版 二〇一一年）、「人生の奥深い真理」、「『普遍的理法的な』もの」（糸井通浩『『こと』認識と『もの』認識——古代文学における、その史的展開——』『日本語論の構築』清文堂 二〇一七年）とする考え方によれば、当歌の「もの」は単なる抽象概念ではなく、仏教的無常観をふまえて、自分の力で変える事の出来ない運命、宿命といったニュアンスを汲み取ることができよう。接続助詞「ば」は、上句を順接仮定条件句として統括し、下句に接続する。

あきをまたでぞ「あき（秋）」の語は、本集に一八例詠まれ、「春」の二七例について多い（二四番歌の【語釈】該項参照）。夏部にも当歌の他に「あき（空白）」はちすひらくる水のうへはくれなゐふかき色にぞありける」（二八）もあり、春につぐ本集の秋への関心の高さがうかがえる（蔵中さやか「歌風の分析」『題詠に関する本文の研究』おうふう、二〇〇〇年、および本集一四番歌【語釈】該項参照）。「……をまたで」は、「春をだにまたでなきぬる鶯はふるすばかりの心なりけり」（後撰集・十一・恋三・七三八・本院兵衛）、「なつのよのありあけの月をみるほどに秋をもまたで風ぞすずしき」（後拾遺集・三・夏・二三〇・藤原師通）のように、その季節にふさわしいものが、それより前に現れることを言う。「またで」という形でヲ格に季節を取る場合、その季節は「春」か「秋」に限られる。なきぬべらなる「なく」は泣くの意味も鳴くの意味も表し、和歌では両者を重ねることが多い。当歌においても、「泣く」の意としては、その主体は言うまでもなく詠み手であるが、初句「うつせみ」から蟬が「鳴く」の意も重ねられている。平安時代中頃までは、蟬は、「あけたてば蟬のをりはへなきくらしよるはほたるのもえこそわたれ」（古今集・十一・恋一・五四三）、「……夏はうつせみ なきくらし……」（古今集・十九・雑・短歌・一〇〇三・壬生忠岑）のように、夏に鳴くものとして詠まれた。これらにおいて、蟬の種類は特定されていないが、その一種であるヒグラシだけは、その名称で、万葉集から「隠りのみ居ればいぶせみ慰むと出で立ち聞けば来鳴くひぐらし」（日晩）（万葉集・八・夏の雑歌・一四七九・大伴家持）、「夕影に来鳴くひぐらし」（日晩之）ここだくも日ごとに聞けど飽かぬ声かも」（万葉集・十・秋の雑歌・二二五七）のように、夏にも秋に鳴くものとして詠まれる。それが、古今集以降は、「ひぐらしのなきつるなへに日はくれぬと思ふは山のかげにぞありける」（古今集・四・秋上・二〇四）、「ひぐらしのなく山里のゆふぐれは風より

ほかにとふ人もなし」(古今集・四・秋上・二〇五)と、秋に鳴くものとして詠まれることが多くなるが、平安時代後期になると、「かぜふけばはすのうき葉にたまこえてすすくなりぬびぐらしのこゑ」(金葉集・二・夏・一四五・源俊賴)、「山かげやいはもるし水おとさえて夏のほかなるひぐらしのこゑ」(千載集・三・夏・二二〇・慈円)と、夏に鳴くものとしても詠まれるようになる。もつとも、この場合も秋の涼感の先取りとして詠まれる。一方、夏に鳴くものであった蟬は、平安時代後期以降になると、「したもみぢひと葉づつちるこのしたにあきとおほゆるせみのこゑかな」(詞花集・二・夏・八〇・相模)、「なくせみのこゑもすすき夕暮に秋をかけたるもりの下露」(新古今集・三・夏・二七一・二条院讃岐)などのように、ヒグラシ同様に秋の涼感を感じさせるものとして詠まれる歌が目立つようになる。これは、平安後期以降は歌語「蟬」がおもにヒグラシを想定して詠まれるようになったことを意味しよう。新古今集の配列で、二六八、二六九番歌が「ひぐらし」を詠み、それに後続する二七〇、二七一番歌が「せみ」を詠むのは、これをよく示すものである。こうした背景には、「嫋嫋兮秋風 山蟬鳴兮宮樹紅」(和漢朗詠集・夏・蟬・一九二・白居易)、「鳥下緑蕪秦苑寂 蟬鳴黄葉漢宮秋」(和漢朗詠集・夏・蟬・一九四・許渾、千載佳句・四季部・早秋・一五七)のように、分類上は夏であっても漢詩自体は、蟬を多く秋に鳴くとする影響もあると考えられる。したがって、古今集以前でも、和歌と漢詩を並べる新撰万葉集には「秋の蟬」(秋・五五。漢詩には「寒蟬かんしやう」、すなわちヒグラシ)という表現が見え、漢詩句を題とする本集でも、「(うつ)蟬」全三例のうち、二例が秋部(四四・五五)にあり、当歌も夏部に配列されながらも、蟬が秋鳴くことを前提とする。「なき」に下接する助動詞「ぬ」は強意の意、「べらなり」は、確定の事実を対象とする推量の助動詞(塚原鉄雄「推量の助動詞——その国語史的考察」、『国語国文』二六巻七号、一九五七年)。「べらなり」は、助動詞「べし」の語幹「べ」に、状態化し体言化する接尾語「ら」がつき、さらに断定の助動詞「なり」が付いたもので、この「なり」の表す断定は、「べし」の主観的判断が現実と一致すること、つまり主観的判断をそのまま客観的実在のようにみなすことである(小松光三「中古の助動詞」『国語助動詞意味論』笠間書院 一九八〇年、竹岡正夫『古今和歌集全評釈 上』二三番歌注 右文書院 一九八一年、中野方子『古今集』における『べらなり』——喩に承接される助動詞『国文』八六 一九九七年、小池博明『『べらなり』歌の場と表現——觀念の事実化——』『二松學舎大学人文論叢』八八輯 二〇一二年など参照)。そのため、接続助詞「ば」を下接する条件句は、確定条件になるのが普通で、当歌のように仮定条件になる用例はごく少ない。当歌においては、本来泣くのにふさわしい季節としての秋ではなく、夏に泣くという主観的判断(觀念)が、実際に夏に泣いてしまうという客観的事実と

して判断されたことを表す（補注）【比較対照】参照）。なお、「べらなり」は、十世紀前半の古今集、後撰集などの和歌だけでなく、和歌とはまったく位相の異なる平安初期の漢文訓読文にも使用されたが、その後急速に減少し古語化した。本集には四例、見られる。

【補注】

【語釈】で触れたように、「あきをまたでぞなく」は、なくのにふさわしい季節が秋であることを前提とする。その前提は、人間と蟬の両方に関わる。

秋を悲哀の季節とする歌は、万葉集には見られないが、平安時代になると、古今集の「おほかたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ」（古今集・四・秋上・一八五。本集三六番歌としても）、本集の「おほかたのあきをかなしとみることにあだなる人はしらずぞありける」（四〇）、「すぎてゆく秋のかなしくみえつるはおひなむことのをしきなりけり」（四三）など、秋の悲愁が明確に詠まれるようになる。これはそもそも日本古来のものではなく、漢詩の悲秋の觀念が持ち込まれたことによるとされる。その觀念に基づくならば、人が悲しくてな（泣）くのは秋なのである。本集に「なく」は二五例あり、そのうち秋部が最も多く九例、三分の一以上を占めている。いっぽう、蟬については、【語釈】に挙げた例くらいしか和歌に詠まれることがなく、しかも、真夏というよりは晩夏か初秋のイメージが強い。

以上の前提があつての「あきをまたでぞなく」なのであり、それは我が身のみならず「うつせみ」＝蟬についても同様に当てはまる。とはいえ、当歌でメインとなっているのは、あくまでも我が身のほうである。詠み手が泣く理由は、「うつせみの身としなりぬる物ならば」という仮定である。この仮定にとくに反実性つまり実際はそうではないという否定は認められないので、文字どおりの仮定・想像にすぎない。そういう仮定・想像をしただけで泣きそうになる、ということもありえないが、いささか感傷に過ぎる感がないだろうか。

注目したいのは、「うつせみの身となる」という表現である。仏教的無常觀に基づくなら、人間もまたもとはかない存在なのであつて、ある時、急にはなくなるわけではない。とすれば、そういう存在であることを否応なく痛切に思い知らされる状態になることが想定される。たとえば病氣であり、老衰である。体が不如意になって初めて思い知らされるのであり、気の弱りが死を強く意識さ

せることになるからである。そういう時の仮定・想像ならば、そしてそういう思い込みが強くなりがちであれば、それなりのリアリティは感じられるかもしれない。

ただし、そのことが夏という季節とどのように関係するかと言えば、少なくとも夏だからという理由付けはできそうにない。春・秋に比べれば、氣候の厳しさが病老と結び付けられなくもないものの、そういう類いのことは和歌世界とは無縁である。当歌が夏歌として成り立つのは、ひとえに「うつせみ」の存在によってであるが、それさえ「あきをまたで」という表現がいみじくも示すように、夏の素材としては必ずしもふさわしいものではなかったのである。

なお、当歌は、赤人集（五〇）にも「うつせみのみとしなりぬるわれなれば秋をまたでぞやみぬべらなる」と、第三句と結句をかえた形で載る。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の五言律詩「病中書事」詩（卷五十三・二三三九）であり、句題はその頷聯の第二句である。この詩の頷聯の第一句も、すでに示したとおり、二三番歌の句題となっている。

三載臥山城 三載山城に臥し、

閑知節物情 閑に節物の情を知る。

鶯多過春語 鶯は多く春を過ぎて語り、

蟬不待秋鳴 蟬は秋を待たずして鳴く。

氣嗽因寒発 氣嗽寒に因つて発し、

風痰欲雨生 風痰雨ならむと欲して生ず。

病身無所用 病身用ゐる所無く、

唯解下陰晴 唯解くのみ、陰晴を卜すを。

二三番歌【比較対照】で述べたように、「この詩において、鶯にせよ蟬にせよ、それらが夏の景物であることを示すものでは決してない。首聯にあるように、病床に伏して過ごしているからこそ気付く自然の実際の変化のありようなのであり、蟬についても「秋の物であるはずの蟬はその前の夏から鳴いているということである」。そして、千里が「そういう詩の一句を句題にしたのであるから、季節歌であるにもかかわらず、定番どおりに詠むことにならないのは、当然至極であり、いわば確信犯的な選択・詠歌である」。当歌でのその戦略は、蟬をそのままそっくり人間つまり詠み手に置き換えるというものであった。

表現上の対応として見れば、句題の「蟬」「不待秋」「鳴」は、歌の「うつせみ」「あきをまたで」「なき」に写されている。加えられたのは、第二・三句の「身としなりぬる物ならば」と、その仮定に連なる結句末の「ぬべらなる」である。この第二・三句の付加が、原拠詩の該句を換骨奪胎してしまった。原拠詩では、蟬そのものが実際の情景描写の一つとして位置付けられるが、当歌はその情景描写を捨て、蟬をあくまでもイメージ化することによって、人間の心情を詠む歌にしたのである。

しかし、該句のみならず、原拠詩全体として見れば、「病中」の我が身を歌い、「病身無所用」とも表現しているのであるから、それが当歌のいう身のはかなさに通じているとも言える。つまり、当歌は、句題に対する小異を捨てて、原拠詩全体の大同に付こうとした歌と見ることができよう。

鶯語々漸稀（鶯語、語ること漸く稀なり）

二五 うぐひすはときならねばやなくこゑのいまはまれらになりぬべらなる

【通釈】

鶯は、（もはや鳴くのにふさわしい）季節ではないからか、鳴く声が今は稀になってしまったようであるよ。

【語釈】

うぐいすは「うぐひす」については、二・二三番歌【語釈】該項を参照。初句末に「は」を置き主題を示すのは、本集では当歌以外に、二三番歌の「うぐひすは」と六九番歌の「てる月は」の二首のみ。三首のうちの二首が「うぐひす」を初句に置いて一首全体の主題とし、かつそれが主語（主格）になっていないケースである。第四句にも「いまは」と「は」が出て来るが、それは対比を示す。

ときならねばや「とき」は時間一般を表す場合と特定の時間を表す場合とがある。当歌の「とき」は後者であり、決まった時節をいう。それは単に決まっているというだけでなく、もつとも盛んな時期であることも意味する。当歌の場合、「とき」が問題とされるのは鶯の鳴き声に關してであり、それはすなわち春という季節である。その「とき」を打ち消した「ときならね（ず）」は、「時ならず（不時）玉をそ貫ける卯の花の五月を待たば久しくあるべみ」（万葉集・十・一九七五）、「耳なしの山ならずともよぶこどり何かはきかん時ならぬねを」（後撰集・十四・恋六・一〇三五・女五のみこ）などのように、季節外れであることを表す。当歌も、鶯が鳴くには時節外れであることをいう。接続助詞「ば」は、初、第二句を順接確定条件句として統括し、その結果を示す第三句以降に接続する。係助詞「や」を下接する「ばや」は本集に五例見られるが、当歌以外（一、一四、一八、六六）はすべて三句目末に位置する。

なくこゑの「なくこゑ」は、二三番歌の第四句にも「なくこゑおほき」という形で出ている。「なく」の主体は初句の「うぐひす」であるが、主述関係としては結び付いていない。句末の「の」は主格助詞で下句に対応する。

いまはまれらに 係助詞「は」は、詠歌時の「今」（現在）とそれまでの過去とを区別、対比する。「まれらに」から「今」と対比されるのは、鶯の鳴く季節とされる春か、二三番歌のように、過ぎた春を惜しんで盛んに鶯が鳴く初夏かのいずれかが考えられる。二三番歌【補注】で述べたように、本集には、当歌の他に鶯の囀りの多寡を詠む歌として、当歌と二三番歌の他に、「やまたかみふりくる霧にむすればやなくうぐひすのこゑまれらなる」（一）がある。この三首の配列順から、春の最初は稀だった鶯の声が、初夏には春を惜しんで盛んに鳴き、夏が進むとともに次第に稀になるという、作者の配列意図が読み取れる。「今」は二三番歌で詠まれた初夏と対比される、つまり夏も盛りに近い時期ということになる。「まれらに」については、一番歌【語釈】該項参照。

なりぬべらなる「べらなる」は、第二句末の係助詞「や」の結び。「べらなり」は二四番歌の【語釈】該項および【補注】参照。「いま」と共起する推量の助動詞は、現在推量の「らむ」が多いが、「べらなり」にもわずかながら、「あふことの まれなるいろに……わたつ

みの おきをふかめて おもひてし おもひはいまは いたづらに なりぬべらなり……」(古今集・十九・雜牀・短歌・一〇〇一)、「なくしかのこゑうらぶればときは今はあきのなかばになりぬべらなり」(家持集・一二二)、「ことさらにきみはこしかどさくらばなかでぞいまはかへるべらなる」(躬恒集・二二六七)などの用例があり、いずれも今そのことが実現しそうであることを示す。その判断には、主観的、疑惑的な「らむ」と違って、客観的な根拠がある。挙例で言えば、古今集歌は相手に逢うことが困難であること、家持集歌は鹿の沈んだ声、躬恒集歌は桜花はいくら見ても満足しないものだということ、それぞれの経験・知見が確かな根拠としてある。それゆえ、「べらなり」は疑問表現を伴わないとされるが、当歌では疑問の係助詞「や」を伴う点で、特異である。二四番歌も、仮定条件句を伴うという点で、特異であり(ちなみに一一四番歌も)、あるいは千里独自の用法だったのかもしれない。

【補注】

初春に鶯が鳴くのを待つ状況で鳴かないと詠む歌は多いが、時期を過ぎて鶯が鳴かなくなること詠む歌は、三代集の頃まではほとんどなく、万葉集に「(五月九日に兵部少輔大伴宿禰家持の宅にして集飲する歌四首)／うぐひすの声は過ぎぬ(宇具比須之 許恵波須疑奴)」と思へどもしみにし心なほ恋ひにけり」(万葉集・二十・四四四五・大伴家持)の一例、平安時代に入って、「おなじ御ときに、四月一日うぐひすなかぬよしのうたよめとおほせらるるに／春はただきのふばかりを鶯のかぎれることもなかぬけふかな」(公忠集・七)、「春のくれつかた／はなもちりうぐひすのねもかれゆけばわがやまざとはあくがれぬべし」(重之集・一一五)などがある程度である。

その中であって、貫之歌には、「くれぬとてなかずなりぬる鶯の声の内にや春のへぬらん」(貫之集・三五二)、「行く春のたそかれ時になりぬれば鶯の音も暮れぬべらなり」(貫之集・四三七)、「春のけふくるるしは鶯のなかずなりぬる心なりけり」(貫之集・四三八)、「桜花をる時にしもなくなれば鶯の音も暮れやしぬらん」(貫之集・四七四)と、四例もあるのは注目される。これらは全て暮春に鶯が鳴かなくなったことを、春の暮れることと重ねて表現するものであり、中野方子「貫之集歌語・類型表現事典」『平安前期歌語の和漢比較文学研究』笠間書院 二〇〇五年によれば、「花少鶯亦稀 年年春暗老」(登村東古塚)『白氏文集』〇四五九)や「鶯収好語樹凋粧 向老驚傷過歲芳」(三月晦日送春感題)『田氏家集』三二)などの漢詩の類型表現の影響が認められるという。ただし、これらの貫之歌はどれも春の季節内であって、夏には及んでいない。

また、構文から見ても、挙例の貫之集四三七番歌が、「已然形＋ば……べらなり」となっていて、当歌と類似するが、当歌は、「うぐひすは」と始まる題述構文であって、この点で貫之集四三七番歌と異なる。他の用例を見ても、鶯を取り立てて説明する用例はなく、暮春の情景として鳴かない鶯を描写する。平安時代の六例中三例が「鶯の音も」とするのは、春が暮れるのと併せて鳴かない鶯を取り上げていることをよく表している。

本集では春歌に鶯を詠んだ歌が三首（一・二・七）あるが、暮春の時期の例は見られず、惜春と鶯の鳴き声がともに歌われるのは夏歌になってからである。しかも、その鳴き方について、当歌のほぼ直前とも言える二三番歌が当歌とはまったく反対のさまを歌っている。これはどういうことであろうか。

二三番歌は「すぎにし春をしみつ」とあるように、惜春の思いを理由として、「なくこゑおほき」と結び付けられている。惜しむ気持の強さが鳴き声を多くするということである。それに対して、当歌は「ときならねば」であって「ときすぐれば」ではない。つまり、「いま」はその「とき」ではないと、その「とき」すなわち盛んに鳴くべき時期と、言わばピンポイントで対比的に示しているのであって、哀惜を伴う時間的経緯を問題にしないのである。

つまり、二三番歌と当歌は、「うぐひすは」で始まり、それを主題とした歌という点では共通するが、その鳴き声に関して、前者が惜春という観点から多さを、後者がタイミングという観点から少なさを示そうとしたということである。

なお、当歌は、赤人集に「うぐひすもときならねばぞなくこゑはいまはまれらになりぬべらなる」（赤人集・五一）として、初句、第二句、第三句のそれぞれの句末を異にして載る。

【比較対照】

原拠詩は、次の、白氏文集の五言排律「春末夏初、閒遊江郭三首」（卷十六・〇九三四）の「其二詩」（卷十六・〇九三五）であり、句題はその二句目に当たる。

柳影繁初合　柳影、繁にして初めて合ひ、

鶯声洪漸稀　鶯声、洪なること漸く稀なり。

早梅迎夏結 早梅、夏を迎へて結び、
殘絮送春飛 殘絮ざんしよ、春を送りて飛ぶ。
西日韶光尽 西日、韶光さうかう尽き、
南風暑氣微 南風、暑氣微なり。
展張新小簾 新しき小簾せうてんを展張し、
熨帖旧生衣 旧き生衣みてふを熨帖す。
緑蟻杯香嫩 緑蟻、杯香嫩とんたり、
紅糸鱸縷肥 紅糸、鱸縷くわいる肥たり。
故園無此味 故園に此の味ひ無し、
何必苦思歸 何ぞ必ずしも苦ねむろに歸るを思はむ。

しかし、異本系は「鶯語洪漸稀」で、原拠詩句に近いが、藏中校本によれば、流布本系に原拠詩どおりの句は認められない上に、「洪」の存する本文もない。校本から復元するに、流布本系には、「鶯語々漸稀」声イ「鶯語漸稀」下上カ「鶯語〇漸稀」稀「鶯語日漸稀」漸々「鶯語漸々稀」漸々などの本文があるようであり、鶯の声が少しずつ稀になることを意味する表現という点では一致していると見てよい。

本釈論はこの句題を校訂することをしなかった。原拠詩どおりの異本系の句題は、初夏に鶯の声が滑らかになることをいうのに対して、歌は稀になる鶯の声を詠んだものであるから、内容的には正反対となり、そのままではとても認めえない。とすれば、この白詩を原拠詩と認定すること自体に問題があるのかもしれないし、あるいはもともとの白氏文集のテキストの問題なのかもしれない。ただ、流布本系の句題ならば、和歌は句題に沿って詠まれたと見ることができることから、それらの問題については留保することにした。

実際に、夏になって、鶯の鳴き声がどう聞こえたかという問題も背景にはある。二三番歌の句題原拠詩も白氏文集の五言律詩「病中書事」詩（卷五十三・二三三九）であり、句題は「鶯多過春語」であって、「鶯声洪漸稀」のほうに近いのである。

この詩は「春末夏初」と詩題にあるように、その時期の情景を中心に描いたものであり、前半にはさまざまな自然素材が取り上げられている。ただし、夏歌の素材としてふさわしいものは見出しがたい。千里がこの詩句に注目したのは、初夏にも鶯が詠まれているという点ではなかったかと考えられる。その鳴き方の如何は別として。

句題と歌との関係では、句題の「鶯語」に歌の初句の「うぐひす」と第三句の「なくこゑ」、同じく「漸」に「いまは」、「稀」に「まれら」がほぼ相当し、句題の表現全体を歌がカバーしている。ただし、「漸」と「いまは」は時間に関わるという点で関連しあうが、「漸」が推移を表すのに対して、「いまは」はその結果を示すという点で違いがあり、それは歌に付加された表現と連動した改変であろう。

歌で加えられたのは、第二句の「ときならねばや」と結句の「なりぬべらなる」である。「ときならねばや」は句題の表す事態の要因を示すものとして、「なりぬべらなる」はその原因の推量の確からしさを示すものとして補われたと見られる。そして、本集の歌の大方がそうであるように、そのように付加・補足された部分に、歌の眼目が据えられる。当歌の場合は、【補注】に述べたように、「ときならねばや」という原因設定がまさにその眼目に当たる。

餘華葉裏稀（餘華、葉の裏に稀なり）

二六 ちりまがふ花はこのはにかくされてまれににはへる色ぞともなき

【通釈】

散り乱れる花は木の葉に隠されて、まれにでさえ照り映える美しい色らしきものもない。

【語釈】

ちりまがふ 散り乱れる、しきりに散るの意。「梅の花散り紛ひ（知利麻我比）たる岡^{おか}辺^へにはうぐひす鳴くも春かたまけて」（万葉集・五・八三八・榎氏鉢麻呂）、「ちりまがふ色をみつづぞなくさむる雪のかたみの桜なりけり」（貫之集・四一二）のように、花の他、紅葉、

雪についていうことが多い。本集では二首（四・二六）に見られ、どちらも花について用いられている。

花はこのほに 初句から続く「ちりまがふ花は」が、一首の主題を成す。「このは（木葉）」は、夏に繁った葉をいう。散る花は春、繁茂する葉は夏の景物であるためか、両者がともに詠まれる用例はほとんどなく、平安時代中期頃までは、「花ちりし庭の木葉もしげりあひてあまてる月の影ぞまれなる」（好忠集・三八一、新古今集・三・夏・曾禰好忠・一八六）がある程度。しかも、この歌の「花ちりし庭」という表現からは花が散るのは過去のこととて、繁茂する葉と同時のものとして詠まれているわけではない。「緑の葉」という表現で、「にはひつつちりにし花ぞおもほゆる夏は緑の葉のみしげれば」（後撰集・四・夏・一六五）、「惜まれし梢の花は散り果てて厭ふ緑の葉のみ残れる」（栄花物語・根あはせ・女院〔彰子〕・五一）のように、花とともに詠まれた用例がわずかに見えるが、花の散ることと葉の繁ることには時期的ズレがあつて、当歌のような、同時の事態ではない。

かくされて「隠す」＋受身の助動詞「る」＋接統助詞「て」。全釈は、同表現が他に検索しえないとして、「妹が目の見まく欲しけく夕闇の木の葉隠れる（木葉隠有）月待つごとし」（万葉集・十一・二六六）の「木の葉ごもる」、「奥山の木葉隠りて（木葉隠而）行く水の音聞きしより常忘らえず」（万葉集・十一・二七二）の「木の葉がくる」の例を挙げる。他動詞「隠す」に対する自動詞「隠る」に絞れば、平安時代後期には、春の「残花」題のもと、「尋残花心をよめる／ちりぬとて尋ねざりせば山桜あをばがくれの花を見ましや（続詞花集・二・春下・八四・静厳法師）」、「残花留人といふ事をよめる／はがくれにひとえだのこる花みては心もちらぬ物にぞ有りける」（月詣和歌集・三・三月・二一六・藤原実家）、「二条院御時、尋残花といふことを／やまふかみなほたづねゆけおのづからあを葉がくれにはなやのこると」（万代和歌集・二・春下・四六三・藤原実国）といった、葉に隠れる花が少数ながら検索でき、すべて「（青）葉隠れ」の形をとる。つまり、「花が葉に隠る」であつて、当歌のように「花が葉に隠される」という認識ではない。ただし、対応する自動詞と他動詞（「かくる」と「かくす」）の関係において、自動詞と、他動詞の受身形とは意味的にかなり近接的である。異なるのは他者の意図性の関与の有無であり、他動詞の受身形の場合は、その意図性が感受されることもある。当歌においても、それは認められなくもない。【補注】参照。

まれにほへる「まれに」が直統する「にほへる」にかかるとすれば、他に用例を見出しえない。通常「にほふ」という状態について、その回数の多寡が問題になることがないからだろう。本集では、他に二九番歌に「ふく風にえだもむなしくなりゆけばおつるはなこそ

まれにみえけれ」とあり、「おつるはな」について「まれにみえ」とする。類似の表現に「まれらなり」があり、一・二五番歌で鶯の声について言う。「にほふ」は、四番歌も「ちりまがふ」花に關して用いられている。四番歌は視覚、嗅覚双方の意味を表すが、当歌は「まれににほへる」が次句頭の「色」を修飾し、かつそれが「このはにかくされて」というのであるから、視覚的な用法に限定されよう。「にほふ」については、四・五番歌【語釈】該項参照。

色ぞともなき 「色」＋「ぞ」（係助詞）＋「と」（格助詞）＋「も」（係助詞）＋「なし」（形容詞）。この「色」は文脈からは「ちりまがふはな」の色であり、それが「まれに」も「なき」なのであるから、まったく見られないということになる。「ともなし」は連語として、「体言あるいはそれに準ずる句について、そのように限定するわけにはいかない状態であるさまを表す」（『日本国語大辞典』第二版）ということから、花の色らしきものさえも見られないという強調になる。

【補注】

当歌に詠まれた花木は特定しえない。桜ならば自生の山桜系であったとしても、花の咲き散る時期と葉の繁茂する時期は分かれているので、当歌のような状況にはなりえない。それ以外の、歌に詠まれる春の花木を考えてみても、散る花を覆い隠すほどに葉が繁茂するようなものは見出しえない。とすれば、当歌は句題から喚起された、あくまでも仮想上の状況設定と考えざるをえない。

散る花に「にほふ」という美を見いだすという発想はなくもなく、「さくらの花のちるをかきあつめてよさぶらひにおかせたまへりけるをみて、びはのおとど／ちる匂ひあだなる物といふなればかくてのみこそみるべかりけれ」（兼輔集・一五）や「おほぞらにちりにしはなやにほらんくものほるとも見ゆるよひかな」（小大君集・四）などの例はある。しかし、かりに当歌がそういう状況をふまえたとしても、それさえ否定しているのだから、類似例とはみなしがたい。

第二句から第三句にかけての「このはにかくされて」という受身表現は、「このは」がわざとそうしているという意図性が含まれている。それは、詠み手としては「まれに」であっても「にほへる色」を見たいのにもかかわらずという思いの投影である。つまり、木の葉のせいで、それが見られないという恨みの氣持が示されていることになる。

漢詩では夏の緑陰を好んで歌うが、古今集成立前後にはそのような美意識の表れはほとんど見出せない。松や柳のような例外はあるものの、あくまでも植物に対する一般的な関心の中心は葉でなく花にある。当歌が、「このは」ではなく、「ちりまがふはな」に対して

も、「にほへる色」を求めていたとすれば、それはそのような関心のありようをデフォルメしてみせたものと捉えることができる。その成否はともかくとして。

【比較対照】

この句題は、原拠詩未詳であるため、句題と歌の関係のみを取り上げる。

関係し合うのは、句題の「餘花」と歌の「ちりまがふ花」、句題の「葉裏」と歌の「このはにかくされて」、句題の「稀」と歌の「まれ」であり、句題の表現全体が歌に生かされている。しかし、「稀」と「まれ」以外は、そのままの対応とは言えない。

「餘花」は散り残って、まだ枝に付いている、残り少ない花のことであるから、「ちりまがふはな」ではない。ただ、状況として、一方で散る花があり、もう一方でまだ散らない花があるとすれば、そういう状況に対する視点の置き方の違いと考えることができる。つまり、散り残る花のほうに注目したのが句題であり、散っている花のほうに注目したのが当歌である。「葉裏」つまり葉の陰に対する「このはにかくされて」は、名詞的な表現を動詞的な表現に置き換えたものであろう。

歌で付加されたのは、下句の「(まれに) にほへる色ぞともなき」である。句題の「稀」は少ないながらもその存在が認められるのに対して、歌では最後に「なき」を持って来ているので、「まれ」であることも否定することになる。

句題は、原拠詩の、おそらくは情景の一つの描写であろう。歌はそれに趣意を添えて一首と成すのであるが、当歌の場合、夏歌としての趣意が読み取りがたい。付加された表現は、焦点が置かれた花に関する否定的な詠みぶりを示していて、葉の繁茂するさまを好意的に示しているとは取れない。そこには、鶯歌がそうであったように、肝心の夏よりも春を愛おしむ感がある。

春尽啼鳥廻（春尽きて啼鳥廻る）

二七 かぎりとはるのすぎにし時よりぞなくとりのねのいたくきこゆる

【通釈】

春の終わりとということ、春が過ぎてしまった時からまさに、鳴く鳥の声が痛切に聞こえることであるよ。

【語釈】

かぎりとして 当歌の「かぎり」は、時間的な限界、最終の意。一六番歌【語釈】該項参照。一六番歌では、「ただあけむあしたぞかぎりなるべき」のように、その最後の日が特定されている。当歌も同様と考えられるが、一六番歌は春歌であるからまだしも、当歌は夏歌の六首目に当たり、まだ三月尽日をひきずっているのはいささか腑に落ちない。「とて」は、「AとてB」で、Bという行動の原因・理由がAにあることを表す。当歌の「かぎりとして」は直近の第二句「はるのすぎにし」を修飾すると捉えられる。赤人集の同歌について、和歌文学大系本も「もう最後だと春が去ってしまった時から」と訳してあり、第二句を修飾したものとみなしている。春が過ぎてしまったのは「かぎり」つまり暦日上の区切りによる。「かぎりとして」は結句の「いたくきこゆる」にかかるのとれなくもないが、右に述べたように、三月尽日からしばらく経過しているという点からはそぐわない。「かぎりとして」は平安時代に十首ほど用例が見えるが、「かぎりとしてながむるそらにこがらしのかぜふきはつるあすやまたる」(一条撰政御集・七二)、「かぎりとして別るる道の悲しきにかまほしきは命なりけり」(源氏物語・桐壺・一・桐壺更衣)と、そのほとんどは初句に置かれる。本集には他に「かぎりとしてのべはるのすぎにし 本集の同じ夏部の二三番歌に「すぎにし春」の句があった。同【語釈】該項参照。

時よりぞ 「時」は、「はるのすぎにし」を受ける。「はるのすぎにし時」とは、三月尽日がすでに終わった時点をいう。二三番歌同様、過去の助動詞「き」は、「けり」と違って現在との断絶性に重点があり、三月尽日を現在とは切り離された過去と認識し、さらに格助詞「より」によって時間的起点からの経過が示されているのであるから、当歌の詠歌時がすでに夏であることが明らかである。「はるのすぎにし時より(ぞ)」は、結句の「いたくきこゆる」にかかる。

なくとりのねの 「なくとり(鳴く鳥)」は、万葉集に「朝日照る佐田の岡^へに鳴く鳥(鳴鳥)の夜泣き^{かへ}反らふこの年ころを」(万葉集・二・一九二・草壁皇子舍人)、「高座の三笠の山に鳴く鳥(鳴鳥)の止めば継がる恋もするかも」(万葉集・三・三七三・山部赤人)など十例余り、本集にも当歌も含め三例(二七・三〇・五一)あるが、平安時代の用例は少ない。「なくとり」という表現だけでは、

それがどんな鳥かは特定しえない（ただ、挙例の赤人歌はその長歌から「かほ鳥」と知れる）。赤人集における同歌に関して、和歌文学大系本の注では、この鳥を鶯（残鶯、老鶯）とし、「春への惜別の思いを鳥も抱いてか、春が過ぎた後に前よりもっと鳴きたてているように聞こえる、という心」を詠むとする。この点については、【補注】参照。

いたくきこゆる「いたく」は形容詞「いたし」の連用形であるが、本来の形容詞としての苦痛なさまの意味から、動詞を修飾する、甚だしいの意の程度副詞としても、上代から用いられる。鳴き声に関わる例としては、「蟋蟀いたくななきそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる」（古今集・四・秋上・一九六・藤原忠房）や「郭公いたくななきそひとりゐていのねられぬにきけばくるしも」（拾遺集・二・夏・一二〇・大伴坂上郎女）などのように、「なく」という動詞の禁止表現とともに用いられるのが普通であり、「きこゆ」にかかる用例は見出せない。これらの「いたく」は鳴き方の甚だしき（声の大きさであれ頻度であれ）を表す程度副詞ととられているが、形容詞としての苦痛の意も重ねられている。当歌の場合は、「なく」ではなく「きこゆ」であるから、「いたく」は鳴き方の程度よりも聞く側の受ける痛切感のほうを表立っていると見られる。先行する二三番歌「うぐひすはすぎにし春ををしみつなくこゑおほきころにぞありける」に照らせば、当歌も声の多さ（頻度）を「いたく」で表しているとみなすのが順当かもしれない（全釈では「鳴く鳥の声がはなはだしく聞こえる」と解している）が、当歌では「こゑ」ではなく、情感性を込めた「ね」が用いられている点からも、単なる程度ではないと考える。

【補注】

当歌を句題と切り離して考えてみた場合、【語釈】でも触れたように、疑問となることが二点ある。一つは、夏歌なのに、なぜこれほど三月尽日にこだわったのかという点、もう一つは、鳥の鳴き声をどのように受け止めたのかという点である。

一つめについては、二三番歌【補注】でも取り上げたが、それは夏歌のまだ二首目である点を考えれば、理解できなくはないものの、二五番歌そして当歌まで及ぶとなると、夏歌としては常軌を逸しているのではないかとということである。二つめについては、惜春の思いを鳥と共有するのとるのが一般的であろうが、二三番歌のようにそれを明示しているわけではないので、夏歌としては別の捉え方をする必要があるのでないかということである。

【比較対照】でも触れるように、当歌の「なくとり」は鶯である蓋然性が高い。何より、夏歌として二三番歌にも二五番歌にも「う

ぐひす」が出て来るのであるから、一連の歌として位置付けられる。鶯は留鳥であり、春先から夏まで鳴き声が聞かれる。繁殖期は初夏であり、その頃にもっともよく鳴くという。このような生態を知っていたかどうかはともかくとして、実際に夏になっても鶯の鳴き声は聞かれていたはずである。ただ、歌の素材としてはあくまでも春であり夏ではなかったというだけである。千里が目をつけたのは、まさにそこだったのではないか。つまり、季節歌材としての鶯の見直しである。

当歌第三句の「時よりぞ」の「ぞ」に注目したい。この「ぞ」が強調するのは、春が終る以前ではなく以後という点である。愛惜であれ哀惜であれ、その対象として鶯の鳴き声を取り上げられるのは春という当時の常識に対して、むしろ夏のほうにこそ情感に訴えるものがあることを言わんとしたのである。当歌下句に用いられた「ね」や「いたく」はそういう意味での措辞であり、惜春の思いとは無縁の、夏そのものにおける新たな歌材としての鶯の可能性を示そうとしたと考えられる。

なお、赤人集に「かぎりとはるのすぎにしときよりぞなくとりのねもいたくきこゆる」(五二)とあり、第四句末助詞が異なる。

【比較対照】

当句題の原拠詩も未詳であるため、句題と歌の関係のみを取り上げる。

表現としては、句題の「春尽」には歌の「はるのすぎにし時」、同じく「啼鳥」には「なくとり」がそのまま対応するが、句題最後の「廻」には対応語が見られない(異本系統書陵部本には「急」とあり、それならば結句の「いたくきこゆる」と結び付けうるが)。歌の「時より」の「より」、「とりのね」の「ね(音)」は、句題の表現を補ったものであろう。句題に関係なく、新たに付加されたのは初句の「かぎり」とて」と結句の「いたくきこゆる」である。ただし、「かぎり」のほうは「はるのすぎにし時」を言い換え、重ねることにより強調するためとも考えられる。

句題だけを見る限りでは、「啼鳥」は夏の鳥とも想定しうる。たとえばホトトギスであり、「廻」という移動動詞はそれに似つかわしい。古今集にも、「けさきなきいまだたびなる郭公花たちばなにやどはからなむ」(古今集・三・夏・一四一)、「ほととぎすながなくさとのあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから」(古今集・三・夏・一四七)などのように、その顕著な移動性がよく詠まれているからである。

しかし、千里は「かぎり」とて」という理由を添えることによって、その可能性をあっさりと排除した。不思議なことに、新撰万葉集

では二一首中の二一首、古今集では三四首中のじつに二八首にも、夏歌にホトトギスが詠まれているのにもかかわらず、本集の夏歌には一首も見られない（本集最後の、句題のない詠懷部に一首あるのみ）。そもそも漢詩ではホトトギスを詠む例が少なく、適例が見当たらなかったからかもしれないが、あえて避けたとしか考えようがない。

夏の鳥ではなく春の鳥となれば、先述のように、鶯が第一候補となる。というよりも、春の鳥一般ということも、鶯以外の個別の鳥ということも、鳴き声を取り立てられるかぎり、古代和歌においては想定できないのである。

句題との関係でもっとも問題になるのは、付加された結句である。句題の「廻」字からは「いたくきこゆる」は導かれようがない。それはおそらく、「啼鳥」を鶯と同定したことにとまなう改変であろう。千里にとつて、「春尽啼鳥廻」という句題は、その限定性・特定性の緩さによって、彼の果敢な意図を表現するのに、都合が良かったのではないかと推測される。

蓮開水上紅（蓮開きて水上紅なり）

二八 あきならではちすひらくる水のうへはくれなるふかき色にぞありける

【通釈】

（紅葉の色が映える）秋ではないのに、蓮の花が開く水の面は、紅の濃い色であることよ。

【語釈】

あきならで 底本は「あき」のあと空白。流布本系統の文保奥書本系八本の「ならで」を補う。校訂については、【補注】参照。「あき（秋）＋なり（助動詞）＋で（接続助詞）」。「で」は、上接語の「あきなり」という状態を打ち消して、その状況のもとに、第二句以下全体の表す事態が存在することを示すのにつなげる。構文的には、直近の第二句「はちすひらくる」のみを修飾することも考えられるが、蓮の花は夏から咲くので、それでは当たり前のことを示すに過ぎなくなるので、採らない。「あきならで」という句は、平安時代に、

「秋ならであふことかたきをみなへしあまのかはらにおひぬものゆゑ」(古今集・四・秋上・二三一・藤原定方)、「秋ならでおく白露はねざめするわがた枕のしづくなりけり」(古今集・十五・恋五・七五七)など四例ほど見え、どれも当歌同様、初句に置かれる。【補注】参照。

はちすひらくる 「はちす」は「はす(蓮)」の古名で、歌語化したと見られる。その実が蜂巢に似ていることに由来するという。蓮は仏教との関わりが深く、和歌でも「はちすばのにこりにしまぬ心もてなにかはつゆを玉とあざむく」(古今集・三・夏・一六五・遍昭)のように、法華經の文言をふまえた仏教的な要素を込めて詠まれることが多い。もともと、それは平安時代になってからのことで、万葉集では、「蓮葉(蓮葉)はかくこそあるもの意吉麻呂が家なるものはうもの葉にあらし」(万葉集・十六・三八二六・長忌寸意吉麻呂)、「ひさかたの雨も降らぬか蓮葉(蓮荷)に溜まれる水の玉に似たる見む」(万葉集・十六・三八三七)などのように、植物そのものとして詠まれている。当歌にも、仏教的な背景は認められない。また、如上の例からも明らかのように、取り上げられるのはもっぱらその大きな葉であり、花ではない。当歌では、「ひらくる」は下二段活用 of 自動詞「ひらく(開)」の連体形であるから、その主語は蓮の花以外にはなく、希少例となる。

水のうへは 第二句を受けて、一首の主題となる。場所である「水の上」は格助詞「に」が下接することが多く、「は」を下接し主題となるのは珍しい。万葉集に「そらみつ 大和国は 水の上は(水上渡) 地行くごとく 船の上は 床に居るごとく……」(万葉集・十九・孝謙天皇・四二六四)があるが、点線部と対句をなす対比の用法であり、それ以降は、鎌倉時代の「水のうへはくもまの月の心ちして」「かげぞさやけき」(弁内侍日記・二四九・少将内侍)まで下らないと用例が見られない。「うへ」を字義どおり水上と捉えれば、当歌は、水上に開花した蓮花そのものを詠むことになるが、「水の上(水上)に数書くごとく我が命妹に逢はむとうけひつるかも」(万葉集・十一・二四三三)、「流れての世をもたのまず水のうへのあわにきえぬるうき身とおもへば」(後撰集・十五・雑一・一一五・大江千里)など、「水の上」で水面(「水の面」)を意味する用例も多数ある。当歌は、【補注】に示す捉え方から、水面の意ととる。なお、「水の上」あるいは「水の面」と「はちす」「はす」がともに詠まれた用例は検索しえない。

くれなゐふかき 「くれなゐ」は鮮明な赤色、「ふかし」は、その紅色が濃いさまを表す。「くれなゐ」と「ふかし」との組み合わせは、万葉集から「紅に深く(紅尔深) 染みにし心かも奈良の都に年の経ぬべき」(万葉集・六・一〇四四)などと見られるが、「くれなゐふ

かき」という一句の形は、「もみぢばのながれてとまるみなとには紅深き浪や立つらむ」（古今集・五・秋下・二九三・素性）、「もみぢばのくれなゐふかき色みればみなそこまでやしはおくらん」（清正集・三三二）、「しろたへにほふもあかぬ梅の花くれなゐふかきいろさへぞ見る」（元真集・一二七）などのように、平安時代になってから見られるようになり、挙例の清正集歌や元真集歌のように、当歌と同じ「紅深き色」という表現もある。「くれなゐ（紅）」は、多く衣服、紅葉、花（特に紅梅）などの色の形容として詠まれるが、蓮花については少ない。蓮の花の色の実際は、淡紅色いわゆるピンク色が一般的であって、当歌のような「くれなゐふかき色」とは言いがたい。おそらくは他の色（葉の緑色や露の白色）とのコントラストにおいてであろう。

色にぞありける「色（いろ）」は上接の「くれなゐふかき」を受ける。「にぞありける」の「ぞ」を抜いた「にありけり」の表現価値は、「なりけり」と同じであり（二三番歌【語釈】該項参照）、当歌も「……は……なりけり」の構文となる（一二番歌【補注】参照）。

【補注】

【語釈】「あきならで」の項で触れたように、底本では初句に脱落がある。「釈論（二）」の凡例で示したように、できるだけ校訂を避けて考察するのが基本方針ではあるが、異文はともかく、明らかな脱落は補う必要がある。

蔵中校本によれば、初句については、流布本系統「四月廿五日」本系の文保奥書本系すべてが「秋ならで」とする（そのうち多和文庫本は本行本文「秋ならで」の左に「ちかく」と傍書）。また、同「四月廿七日」（為忠筆）本系のCに分類される大阪市立大学森文庫本、ノートルダム清心女子大本が空白部分に「ちかくイ」、Cの天理図書館本が空白部分に「本」と傍書、その右に「ちかくイ」と傍書する。一方、異本系統は「ちかく」とある。「四月廿五日」本系伝寂蓮筆本系（問題の箇所はすべての本文が空白）について、底本に近いとされる文保奥書本系がすべて同じ本文をもつことから、「秋ならで」と補訂するのが妥当であろう。

全釈では、「ちかく」を補い、「ならで」は「後代の人の手が入ったもの」とし、「秋の気配の見える夏深いころ」と訳す。この解釈は、蓮の花期が七〜八月であり、旧暦では秋となることを考えると、妥当のようにも思われる。和歌において蓮が詠まれるのはもっぱら夏であるが、漢詩では夏だけでなく秋にも詠まれることがある。

ただ、本集四季部のそれぞれの歌配列は必ずしも時期の経過に沿ったものとは言えないものの、当歌は夏部の中ほどに位置し、少なくともその配列からは積極的に晩夏を詠むとはみなしがたい。また、「秋ならで」と「秋近く」では、夏と秋のどちらの季節に重点を

置くかが異なり、前者は夏、後者は秋であって、当歌を夏歌とする限り、前者のほうがより適切であろう。さらに、歌の趣向としても、秋が近いという実際の状況よりも、まだ秋ではないにもかかわらずという反実的な状況を設定したほうが千里の意図により適っていると見られる。

「秋ならで」という打消しは、第三句以降の「水のうへはくれないふかき色にぞありける」という事態の発見の意外性と結び付く。なぜなら、秋ならば、その事態が想定しうるからであり、それは紅葉によってである。古今集には、「もみぢばのながれてとまるみなとには紅深き浪やたつらむ」(古今集・五・秋下・二九三・素性)、「ちはやぶる神世も聞かず竜田河唐紅に水くくるとは」(古今集・五・秋下・二九四・在原業平)などのように、そのことが示されている。つまり、「くれないふかき色」になるのは、水面一面に秋の紅葉が散り敷くことによつてであるというイメージが成り立っていたということである(蔵中さやか「二句題の出典詩の発見」前掲書参照)。

当歌は、そのイメージを裏切つて、まだ夏でありながらも、同じ事態が生じること、それが蓮の紅い花によつてであることをアピールする。そこには、「みわたせば柳桜をこきまぜて宮こそ春の錦なりける」(古今集・一・春上・五六・素性)が、紅葉を秋の山の錦とする共通認識に対する、柳と桜とを春の都の錦として発見するのと同様に、秋の紅葉に紅く染まる水に対する、夏の蓮花に紅く染まる水という発見があつたのである。

千里集歌の特徴の一つとして、内容の抽象性があり、その一例として、詠み込まれた花の中でその種類が特定できる歌が当歌を含めて二例しかないことが挙げられている(津田潔「『大江千里集』に於ける白詩の受容について」『國學院雑誌』八〇巻二号 一九七九年参照)。当歌以外の歌とは「やまごことに萩のにしきををればこそみるにここころのやすき時なし」(九〇)だが、流布本系統では「萩」は「はな」とあって、異文はない。とすれば、伝寂蓮筆本では当歌が本集唯一の種類を特定して詠む花の歌ということになる。それには、季物に対する新発見を示すという、それなりの必然性があつたということである。

なお、赤人集(五三)にも同歌が載るが、初句「あきちかく」、第二句「はちすもひらく」、第三句「みづのおもに」、結句「いろぞみえける」と、異なりが見られる。

【比較対照】

原抛詩は、白氏文集ではなく、次の、初学記の五言律詩「隋煬帝夏日臨江詩」（卷六・江第四）であり、句題は頸聯の二句目に当たる（藏中さやか「二句題の典故詩の発見」前掲書所収による。訓読文も）。

夏潭蔭修竹 夏潭修竹を蔭にし、

高岸坐長楓 高岸長楓に坐す。

日落滄江靜 日落ちて滄江静けく、

雲散遠山空 雲散りて遠山空し。

鷺飛林外白 鷺飛びて林外白く、

蓮開水上紅 蓮開きて水上紅なり。

逍遙有余興 逍遙しては余興有り、

悵望情不終 悵望しては情終らず。
（こころきはま）

詩題中に「夏日」とあるように、夏のある日の江辺の情景を歌った詩である。植物としては「修竹」や「長楓」も取り上げられているが、夏の句題として選ぶなら「蓮」を含む句以外はないであろう。

句題と歌との表現上の対応関係は、五言句ということもあって、句題の語はすべて歌に写され、しかも第二句から第四句にかけ、まとまった形ではほぼ直訳的に表現されている。しかし、歌全体として句題の直訳かという点、まったく趣を異にする。もともと原抛詩の該句は夏の情景の一つとして描かれたにすぎないが、歌ではそこに詠み手の趣意が加わっている。

それが端的に示されているのが、歌で付加された初句の「あきならで」と結句の「色にぞありける」に他ならない。この二句の付加によって、単に見たままの情景が、【補注】で述べた、季節を違えた見立てという、新たなイメージとして生まれ変わったのである。

原抛詩を含む初学記は芸文類聚とともに、平安時代以前から日本文学に大きな影響を与えていたことについては既に多くの指摘があ

り、歌に、蓮の花を取り上げること、その花の色を紅とすることも、無関係ではないであろう。たとえば、万葉集においても、「勝間田の池は我知る蓮なし（蓮無）然言ふ君が鬚なき」とし」（万葉集・十六・三八三五）は、その漢文左注に「水影濤々蓮花灼々」とあって、蓮の花盛りの状況をふまえた歌であることが知れる。

また、本集からおよそ十年後の延喜六年に行われた、句題を歌題とする左兵衛佐定文歌合（開催を疑う向きもあるが）では、「緑沼に浮けたる蓮くれなゐに水にこるなり波たつなゆめ」（左・六）、「くれなゐの蓮うかべる緑沼に白波たてばこきまぜの花」（右・七）（本文は『平安朝歌合大成 増補新訂 一』の「一七 延喜六年右兵衛少尉貞文歌合」による）があり、これも「緑沼紅蓮浮」の句題に番えられたものである。和漢朗詠集の夏部の「蓮」の項にも漢詩句が六例も取り上げられてあり（和歌は古今集の遍昭一六五番歌一首のみ）、その一つには「煙開翠扇清風曉 水泛紅衣白露秋」（和漢朗詠集・夏・一七七・許渾）があつて、蓮の花が「紅衣」にたとえられている。

つまり、本集の時代にあつて、蓮の紅い花が和歌に詠まれることはほとんどなかったにしても、それ自体あるいはその表現は知られていたということである。千里はそれをそのまま歌にすることを潔しとせず、あえて一手間かけて、まったく別物として示してみせたのであった。

【付記】

本稿には、小池に交付されたJSPS科研費16K02390（基盤研究C）による研究成果が反映されている。